

東南アジア研究センター 昭和40年度第3・四半期報告

東南アジア研究センターの10月から12月にいたる昭和40年度第3・四半期の活動状況を要約報告する。

社会科学部門の調査研究計画のうち、タイ国地域調査はいよいよフォローアップ・サーヴェイの段階に入った。まず本岡武教授（東南ア研）は前年度に行なったタイの農業開発にかんする調査をさらに発展させるためふたたびバンコクに赴いた。本岡教授は本期間中のバンコク連絡事務所の責任者である。飯島茂助手（東南ア研）は北タイ・メーサリアンのカレン部落、水野浩一研修員（東南ア研）は東北タイ・コンケン附近の村落、矢野暢研修員（法）は南タイのイスラム村落とそれぞれ前年度に一ケ年を過ぎた各自の調査村へ帰って、フォローアップ・サーヴェイを開始した。マレーシア、ジョホール州エンダオに定着した前田成文（大学院、文）は原マレー人部落の調査を継続した。教育班の森口兼二助教授（教育）は、教育の諸問題を近代化との関連において把握するため、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、カンボジアを歴訪した。また栗本一男助手（教育）はタイ、マレーシア、インドネシアに赴いて、教育制度を視察した。宗教班の藤吉慈海助手（人文科研）はタイ、ラオス、マレーシアにおいて、仏教教団の実態調査を行なった。

自然科学部門では、農業生産班の赤井重恭教授（農）がタイ、マレーシア、シンガポール、カンボジアにおいてイネの病害調査を行なった。川口桂三郎教授（農）は久馬一剛助手（農）とともに熱帯水田土壌研究のため、カンボジア、フィリピンおよびセイロンに赴いた。渡部忠世助教授（京都府大）はタイ国北部でモチ米の、福井捷朗（大学院、農）は中部タイでイネの植物栄養学的研究をそれぞれ継続した。生物班は昨年度の予備調査にひきつづき、田川基二助教授（理）、岩槻邦男助手（理）、北川尚史講師（奈良学芸大）、福岡誠行（大学院、理）らがタイ国北部一南部の山地における植物相の調査を行なった。

養成計異では、1966年留学生として、阪本恭章（AA言語文化研、カンボジア語）、法貴誠（農、農業工学）を採用した。なお石井米雄助教授、パイラット・サーイチュア氏によるタイ語会話コースは引続き開講されている。

秋の旅行シーズンでもあり、センターにも米国からJ・H・クーリッジ博士、L・L・メリット・インディアナ大学副総長、ウルク・アジス・マラヤ大学文学部長をはじめ多数の外国人学者が訪れた。またG・ワシントン大学中ソ問題研究所長 K・L・ロンドン教授を数日招待して、研究会を開いた。

なお最後に図書出版計画としては「東南アジア研究センター所報（Ⅱ）」を邦、英両文で刊行したほか、シンポジウム英文報告シリーズの準備が行なわれたことを報告しておきたい。

1965年12月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍